

今にも崩れそうな木造の校舎、ところどころ割れている窓ガラス。黄色く汚れた小便器と糞にまみれた大便器、雑草が伸びたグラウンド。そのすべてが、荒れ果てた学校の象徴だった。

玄関に誰もいないことを確かめた田川勇太は駐輪場まで全力で走り、自転車のタイヤに釘がささっていないことを確かめると、自転車に飛び乗り裏門を通って中学校を出た。どこで何があるかわからないというのが、勇太の中学校だった。

田植えから一か月ほど経った水田では、稲が勢いを増していた。その水田の間を勇太は自転車に乗って全力で走り、学校から五キロほど離れた千保川に向かうのが、日課となっていた。千保川の河川敷は広く、ヨシが茂っていた。川幅は五十メートルもあり、簡単には渡れない。どんよりとした川では、水産的に価値がある魚はほとんど生息しておらず、漁業者も釣り人もいなかった。

河川敷の小高い一角に、小さな小屋があり、かつては工事のために使われていたらしい。そこが勇太の隠れ家であり、秘密基地だった。河川敷で拾った寝袋、釣竿、たも網、雨具、飲み物などを、勇太はその小屋の中に隠し持っていた。誰かに襲われたときに対抗するために、鉄パイプも置いていた。蚊取り線香も欠かせない。

中学二年の勇太は人嫌いだ。小学校でも中学校でも、勇太に友人はいなかった。そのために、勇太はいつも一人きりで孤立していた。男子の同級生は隙があれば勇太を突いたり殴ったりしようとした。女子たちはそんな勇太を哀れな子猫のように見ていたが、勇太に話しかける者はいなかった。

勇太の成績はクラスで最下位から三番以内であり、いくら努力しても成績が上がるとは思われなかった。勇太が住む町では、中学校のクラスで十番に入ることができなければ、公立高校には進学できなかった。勇太の成績では公立高校は言うまでもなく、私立高校に進学することもむずかしかった。お金を積みめば入学できる私立高校はあっても、勇太の家は裕福ではなかった。勇太には、中学卒業とともに、働くほかに道はなかった。

しかし、勇太は、自分に何ができるのか見当がつかなかった。他人と接するのが苦手であり、学校に行っても誰とも話を交わさずに帰ることが普通だった。女子が近づいてくると、何か悪口を言われるのではないかと心配した。男子が接近してきた場合には、まず武

器を持っていないかチェックし、次に手と足のどちらで攻撃してくるのかを見定め、それに対して防御することを心掛けた。

担任の神谷孝三は面倒なことにはかかわらない主義だった。生徒はしばしば神谷に対しても暴力をふるったが、神谷はただ逃げるだけだった。そのために、勇太が神谷にいじめの相談をすることはなかった。

勇太は小学生の頃は毎日楽しく過ごしていた。田んぼと野山と川に囲まれたのどかな田舎町で、のびのびと暮らしていたといってもよいだろう。小川ではフナやナマズが釣れた。山ではワラビやタラの芽が採れ、秋になればクリやキノコが採れた。友人がいなくても、一人で楽しむことは多く、学校の勉強はできなくても自然から学ぶことは多かった。

状況が変わったのは、中学に進学するとともに、町に近い別の小学校から進学した生徒と同級生になってからだだった。町から来た生徒は全体的に頭が良く意地が悪かった。勇太が何かを言うと、それをつぶすように否定し、言葉遣いや論理矛盾をきびしくとがめるのだった。しかも、彼らはいつも集団で行動し、一人きりの勇太を見つけると、獲物を見つけたかのように喜んで近づいて来た。

授業中に後ろの座席から蹴られたり、教師が黒板に向かっているときに画鋲や鉛筆を投げられたりすることも日常茶飯事だった。休み時間にトイレに向かうときや放課後の掃除時間には、集団で襲われることがあり、金を盗られたり、裸にされたりすることもあった。

中学一年のときは、何かの運動部に所属することが決まりになっていたので、勇太はバトミントン部を選択した。小学校のときには、近所でバトミントンが流行し、勇太も何度か試合をしたことがあった。しかし、バトミントン部では毎日ランニングと素振りばかりであり、上級生には絶対服従し、どこで出会っても深々とお辞儀をしなければならなかった。同級生も意地悪で、ランニングが苦手な勇太を追いかけてラケットで殴ると、走って逃げた。

バトミントン部で勇太をいじめ、二年に同じクラスになってから、いじめグループのボスとなっていたのは麻山寛だった。体格はふつうであったが、頭が良く、勇太をいつも馬鹿にしていた。授業中に勇太が先生からの質問に答えられないと、大声で嘲笑した。

進藤宗一と今出安次郎はそれぞれテニス部とバスケットボール部に所属し、体力でかなわなかった。とくに進藤は大柄であり、上から脅されると足がすくむほどだった。

勇太の町は鉄製品で知られており、勇太の父である弘明は小さな鉄工所に雇われて働いていた。従業員が三人しかおらず、下請け仕事に依存していたので、父の収入は少なかつ

た。母は勇太が小学生のときに病死した。勇太に兄弟はいなかった。

河川敷の隠れ家は、勇太の中学校とは別の中学校の学区にあったので、勇太の同級生がやってくる恐れはなかった。そこですることはいくらでもあった。まず、河川敷のゴミはすべて拾い集めて廃棄した。川が増水した後には、上流から流れ着いたペットボトルやビニール袋が川岸に散乱していたが、そういうゴミを勇太は許さなかった。堤防沿いでは、車や自転車で行きながら、食べ終わった弁当や空き缶を河川敷に放る奴がいた。そういうゴミも勇太には我慢ならなかった。

河川敷には縦横無尽に歩道をつくっていた。車も自転車も通ることはできない勇太だけの路である。誰かに追われたら、高く茂るヨシの中に逃げ込めば、逃げ切ることができると思っていた。

魚を捕ることは勇太にとって最大の楽しみであった。本流は流れが激しいので、勇太の漁場は河川敷を流れる細流とワンドだった。ワンドとは河川敷にある池のことであり、本流とはさまざまな強さでつながっている。ヨシに囲まれたワンドで魚を釣ろうと、たも網をふりかざそうと、人に見られることはなかった。フナ、ハヤ、オイカワなどが獲物であり、ナマズやコイなどの大物が獲れることもあった。釣った魚の一部は食用にした。残りは隠れ家の中に置いてあった甕でしばらく飼ってから逃がしてやった。

野鳥を観察することも、勇太にとって重要な日課であった。河川敷の水際にはチドリやセキレイが多く、ヨシ原ではオオヨシキリやコヨシキリが営巣した。冬になると、ニセアカシアの周りにカワラヒワやツグミ、ムクドリ、ヒヨドリが集まった。カラスやトビも毎日飛び回っており、しばしば上空で縄張り争いをしていた。

ワンドや河川で捕まえた昆虫は標本箱に整理した。とくに見栄えのするトンボ、カミキリムシ、セミ、コガネムシなどのコレクションには自信を持っていた。ワンドにはザリガニやスジエビ、サワガニなどの甲殻類も多く、おいしいので家へ持って帰って食べることもあった。

勇太の父は夜遅くまで働いていたので、勇太が放課後に河川敷にいくことを知らなかった。日没とともに河川敷から二キロのところにある家に戻ると、勇太は自分で食事をつかった。父は勇太の顔がしばしば腫れていることに気づき、その理由を尋ねることがあった。同級生にいじめられたとは言えなかったので、雄太は不良生徒と喧嘩をしたためだと説明した。

五月半ばになって、学級委員長の選挙が行われた。中学二年の初めにクラス替えがあり、

互いをよく知りあうまでは、仮の委員長が指名されていた。勇太は本選挙でもその仮委員長である麻山が選ばれるものと思っていた。初めに開票された女子では、やはり成績が優秀で仮委員長の伊藤理沙子が選出されたからである。ところが開票の結果、選ばれたのは勇太だった。麻山が画策したにちがいないかった。委員長にすることで、さらに勇太をいじめる機会が増えると考えたのだろう。

実際、委員長になったことは、勇太にさまざまな精神的苦痛をもたらした。授業のたびに、「起立」、「礼」と教師に挨拶する号令をかけなければならなかった。しかし、男子生徒は起立しなかったり、礼をしなかったり、一斉に後ろを向いたりして、勇太の号令を無視した。何かのとりきめについてクラス全員の意見をまとめなければならぬときには、男子生徒はどこかに遊びに行ってしまう、勇太と女子だけが取り残された。その女子も勇太に協力することはなく、勇太が何かを言ってもクスクスと笑うばかりだった。仮に何かをきめても、男子たちは後から聞いていない、と言って勇太を批判した。

各クラスの学級委員が集まる学年委員会は、各クラスの俊英の集まりだった。そこに出席した勇太は、白鳥の群れのクラスだった。色や形がちがうだけでなく、まったく劣った存在だった。そんな勇太と同じクラスであることが、伊藤には耐えられないらしく、彼女が勇太に声をかけることはほとんどなかった。

そんなある日、勇太は大きな失敗をしかした。体育の授業に先立って、クラス全員の貴重品を集めて教務室に持っていくところを、集めたまま教室に忘れてしまったのである。勇太はものを忘れることが多かったので、この失敗は起こるべくして起こったと言うこともできるだろう。

幸いに貴重品は教師が見つけて、盗まれることはなかったが、同級生たちは怒り狂い、勇太のことを「大泥棒！」と呼ぶようになった。勇太が手を動かすだけで、女子は首をすくめ、男子は「逮捕する！」と言って勇太を羽交い絞めにした。

勇太はそんな毎日に嫌気がさし、どこかで身投げして死のうと思っていた。校舎から飛び降りるか、川に飛び込むか、それとも隠れ小屋から少し下流に行ったところにある鉄橋で電車に突っ込むか。どの場合が一番楽に死ぬのか思いをめぐらしたが、どれも苦しい思いをしそうで、実行に踏み切れなかった。

一方で、死ぬ気であいつらに対抗できないか考えてみた。しかし、大勢を相手に勝てる見込みはない。いくら勉強しても、成績で上回ることができるとも思われなかった。しかし、麻山一人ならなんとかなるかもしれない。暗闇で麻山を襲ったら成功するかもしれない

い。そして、そのためには一対一で勝てる体力を備えなければならない。

そう思った勇太は河川敷でトレーニングをすることにした。河川敷の小径を毎日走りまくり、気温が高い日には、川で泳いだり潜ったりした。水に沈められた場合の対抗策として、息を止めても何分でも耐えられるように鍛練した。河川敷に生えた木を登るトレーニングも行った。どうしても勝てない相手と直面した場合には、木の上に退避することができると思ったからである。

トレーニングの効果は徐々にあらわれた。初めは三百メートルも走ると息が上がったが、今では一キロくらい走っても疲れなかった。かつては水中で四十秒も経つと苦しくなって顔を上げたものが、二分は息をしなくても平気になった。クロールにしても平泳ぎにしても、数百メートルは楽に泳げるようになった。速い流れでも深い淵でも自由に泳ぐことができる体力を身につけた。木登りした後に、腕だけ、あるいは足だけで、枝にぶらさがることができるようになった。

このほか、木の枝を使って木刀をつくり、時間さえあれば、そこら中の木の幹に面、胴などと言って打ちかかった。シャドーボクシングも繰り返し行った。

やがて梅雨末期の大雨となり、茶色の濁流が川を流れ下っていたが、勇太の隠れ家は冠水せずにすんだ。その理由は上流にいくつものダムがあり、大洪水が起きないように放水量を調節していたからだだった。勇太は雨が降ってもトレーニングを中断しなかった。

しかし、学校で勇太はトレーニングしている素振りを見せなかった。体育の授業において千五百メートル走があっても、勇太はわざとゆっくりと、苦しそうに走り、その順位が最下位になるようにした。水泳では、十メートルも泳げない真似をした。それを見て麻山は大笑いし、進藤や今出は走っている勇太の背中を突いたり、泳ぎを止めた勇太に水をかけたりした。

やがて、待ちに待った夏休みになった。しばらく中学校には行かなくて済むが、昼間の河川敷は暑くてたまらなくなった。勇太は朝の五時から河川敷に出かけ、暑くなったら川で泳ぎ、それから帰宅した。勇太の父はそもそも勇太に関心がなかったこともあり、勇太のトレーニングのことを知らなかった。

八月のある早朝、勇太は河川敷の自分の縄張りの中に、一人の女が入り込んでいることに気が付いた。その女は勇太よりは大人びており、高校生か大学生のように見えた。髪は長く、赤色のフレアスカートと白いブラウスが国旗のようだった。川岸に近い岩場の上に

座り、そこで本を読んでいたので、表情はわからなかった。

勇太はその女に声をかけて追いつくべきか、そのまま放置するべきか悩んだ。しかし、見知らぬ女に声を掛けることによって、自分がこの辺りで活動していることが広く知れ渡るのはまずいと思った。その噂が隣の学区にまで広まったら、同級生たちが攻めてこないとも限らなかった。それに、麻山を襲う計画自体がだいなしになってしまいかもしれなかった。勇太はしばらく様子を見ることにした。

その女はその後毎日あらわれるようになった。早朝の六時頃にやってきて二時間ほど読書してからいったん帰り、夕方になるとまたあらわれた。勇太はその間にトレーニングすることを控えていたが、じきに我慢できなくなった。

そこで勇太は、まず初めに女に見える場所でランニングを試してみた。その女がどういう反応をするか試してみたのである。しかし、彼女は勇太のほうを見ることなく読書に集中していた。これではランニングをしなかったのと同じである。

そこで勇太は夕方になって、川に飛び込んでみた。そして数十メートル向こうの対岸まで泳ぎ、そこから女の近くに帰ってみた。水面から女の足元に浮き上がった勇太を見て、女から声をかけてきた。

「何をやっているの？」

「……………」

「溺れたかと思ったわ。川で泳いだら駄目でしょう」

「体を鍛えているんだ」

「それならプールで泳げばいいでしょう。死んだらどうするの？」

「中学校は嫌いだから行かない」

「何のために鍛えているの？」

「俺をいじめる奴をやっつけるためだ」

勇太は初めて本音を言ったことに、自分のことながら驚いた。

「あんたはいじめられっ子なんだ。それで相手は何人？」

「俺をいじめる奴はたくさんいるが、やっつけようと思うのは一人だ」

「ふうん、それでどこでどうやってやっつけるの？」

「えっ？　そこまで深く考えなかった」

「そんなんじゃないめね。明日までによく考えてみなさい」

「はい、そうします」

そう答えた勇太は、いつのまにかその女に優劣関係において負けていることに気が付いた。

「お姉ちゃんの名前はなんていうんだ？」

「人の名前を聞くなら、まず自分から名乗りなさい」

「俺は田川勇太だ。隣の学区の中学校二年だ」

「私は中村美佐江、山杉高校の一年よ」

「山杉高校なんて、俺には入れない」

山杉高校は、このあたりではもつとも偏差値の高い、秀才のための高校だった。勇太はあらためて美佐江の顔をまじまじと見た。見ているうちに、完全に美佐江に負けた気がして、雄太はそのまま駆けて家に逃げ帰った。

この頃になって、勇太は父に愛人がいることに気が付いた。家にいないのは鉄工所で働いているためだと思っていたが、鉄工所にもいないことが多く、おかしいと思って尋ねてみたら、別の家庭があるとのことだった。その女との間に子供が二人おり、そのうちの一人は男、もう一人は女だという。勇太は怒りも悲しみも感じなかった。自分が置かれている状況を考えると、ちっぽけな問題だと思った。ただ明らかになったのは、父の収入の大半は別の家庭に費やされることになり、勇太は一人で生きていかななくてはならない、ということだった。父は、今まで黙っていて悪かったと謝ったが、その家庭が勇太よりも大事であることは明らかだった。腹違いの兄弟に会いたいかと訊かれたが、勇太は首を横に振った。

その夜、父は勇太の家で過ごしたが、勇太は父と同じ家にいることが耐えがたく、翌日の朝、日が明けるとすぐに河川敷へ向かった。河川敷のヨシの間に潜んでいたカルガモとアオサギが一斉に飛び立った。朝陽が川面を照らし、虫を追ってハヤがジャンプした。誰もいない河原を、勇太は一時間走り続けた。

やがて美佐江がやってきた。

「勉強ができず、喧嘩もできない自分に嫌気がさして逃げ帰ったのに、またやってきたのね」と美佐江は言った。

「ここは俺の縄張りだ。とやかく言われる筋合いはない」

「それで、どうやっていじめた子をやっつけるの？ ちゃんと考えてきたのでしょね」

「いじめのボスをこの河川敷におびきよせて、ボコボコにしてやるんだ。最後には川に突き落としてやる」

「どうやって、ここに連れてくるの？ いじめっ子はたくさんいるのでしょうか？」

「そこまで考えていない」

「ボコボコにして川に突き落とす、というのはいじめっ子がよく使う方法ね。それではすぐに仕返しされてしまうわよ」

「それなら、溺れさせて殺してやる」

「殴られた跡があるならば、他殺だとわかってしまう。警察がしらべれば、ここにいるのはあんたで、あんたが殺したって、すぐにわかるでしょう。それでいいの？」

「恨みは晴らすことができる」

「馬鹿ねえ。それなら自殺に見せかけて殺せばいいじゃない。そのためにはどうしたらいいの？」

「……………」

「次までに考えてきなさい」

そう言って美佐江はまた読書を始めた。

勇太はいつも河原に美佐江がいるので、自分の縄張りが侵略されているような気がした。一方で、学校でも家庭でも、勇太には話をする相手がいなかったため、内容はともかく、美佐江と言葉を交わすことには秘かな喜びを感じた。それに美佐江は美しかった。美佐江に比べると、自分のクラスの女子たちは愚かなドジョウのように感じられた。

ところで、美佐江はどうして毎日河川敷に来るのだろうか。美佐江もまた友人がおらず、勇太と会話することに喜びを感じているのだろうか。あるいは、美佐江には兄弟がおらず、勇太を弟のように感じているのだろうか。いや、ひよつとすると、美佐江もまた学校でいじめられており、その孤独を埋めるために河川敷に来るのかもしれない。

家に帰ると、間もなく父が二人の子供を連れて帰宅した。勇太が嫌だと言ったにもかかわらず、勇太に会わせるために異母兄弟を連れてきたのだ。小学校五年の武雄と三年の美優だという。

「兄弟なんだから、これから仲良くするんだ。勇太はお兄さんなのだから、二人の面倒を見てやるんだ。将来的には同じ家で暮らすことも考えている」と父は言った。

二人の兄弟はすでに勇太のことを聞いていたのだろう。とくに驚きもせず、静かに勇太に向かってお辞儀した。

勇太にはこの二人に向かって言うべき適切な言葉が思い浮かばなかった。気の利いたことを言えるほど、勇太の頭は良くなかったからだ。仕方がないので、勇太は精一杯にこや

かな顔をしてみせた。しかし、ふだん笑うことがほとんどないので、ただ顔を歪めたように見えたかもしれない。

「二人は川の向こう側に住んでいる。いずれ、お前も向こうの家に連れて行って、新しい母さんに会わせてやる」と父は言った。

どうにもいたたまれなくなつて、勇太は河川敷へ走って行った。そこには美佐江はおらず、ほかに誰もいなかった。勇太はランニング、木登り、剣道、シャドーボクシングを行い、最後に川に飛び込んで泳いだ。

翌日も美佐江は来なかった。一方、勇太が家にいた昼間に嫌なことが起きた。麻山たちが勇太の家にやってきたのである。

「おい勇太、遊ぼうぜ」と言つて麻山は家に向かって石を投げた。

「勇太君、いるんだろう。出てこいよ」進藤も怒鳴つた。

勇太の家は築四十年の平屋の市営住宅であり、隣の家とは壁でつながっている。麻山たちの行為が近所迷惑なのは明らかだった。しかし、勇太は窓から離れた台所でしゃがんだまま、じっとしていた。あいつらは夏休みになつて勇太をいじめられなくなったので、こうして押しかけてきたのだろう。人をいじめられずにはいられない性分というのは、ほんとうにあるんだと実感した。こいつらは大人になつても、弱い人間をいじめ続けるのだから。

やがて麻山たちは、玄関の戸を叩いたり、呼び鈴を鳴らし続けたりした。勇太の親がいないことを確信したのであるう、その行為は止むことなく、エスカレートしていった。やがて、隣人が顔を出し、うるさい！と怒鳴つたために、麻山たちは帰って行ったが、彼らが自宅の周りをうろつくことを考慮すると、勇太は今後の行動に注意しなければならぬ。とくに隠れ場所である河川敷のことは絶対に知られてはならなかった。麻山を仕留めるまでは……

その翌日、美佐江はいつもの岩の上で読書をしていた。

「おはよう」と勇太は素直に挨拶した。

「それで、いい方法は見つかった？」美佐江は麻山の仕留め方について訊いてきた。

「殴つたらだめだと思う。ただ、突き落として溺れさせたらいい」

「そうね、それなら事故に見せかけられるし、指紋も残らないわね。でも、あんたがここで活動していることはいずればれるし、麻山に恨みを持つ者としてあんたが浮かび上がる

のは当然よね。やはり、あんたは疑われると思うわ」

「……………」

「もつといろいろな角度から、ものごとを分析しないとだめだわ。そういうことだから、みんなに馬鹿にされるのよ」

「美佐江はどうしてここに来るんだ？」勇太は話題を変えてみた。

「ここは風が気持ちいいし、河川敷もゴミがなくてきれいいじゃない。本の世界を気持ちよく楽しむことができるのよ」

「ゴミがないのは俺が掃除しているからだ」

「そうなの、いい子ね。褒めてあげるわ」

「高校生なのに受験勉強しなくていいのか？」

「あんたは受験のために勉強しているの？ それはつまらないわね。勉強は自分のためにするものよ。受験なんてちっぽけなことだわ。人間として学ぶことはいくらでもある。学校の勉強なんて、その中のほんの一部だし、学校の勉強の中には学ぶ価値がないこともある。だから、そもそも自分が何を勉強するべきなのかを知る必要がある、そのためにはテレビや映画でもいいけれども、本を読むことも大事なよ。あんたは一年に何冊の本を読むの？」

「本を読んだことはない。漫画なら読んでいる」

「ほんとうにしようがない子ね。まるで、その辺のフナやドジョウみたいに無知で無能だわ」

「俺には体力がある。美佐江の首を絞めて殺すこともできる。川に突き落として事故死に見せかけたっていい」

「毎日いじめられてばかりいるのに、言うことだけは立派ね。同じことをいじめっ子に言っつてごらんさいよ。いじめっ子のボスをここから突き落としてみなさいよ」

「……………」

「どうなのよ」

「美佐江には兄弟はいるのか？」

「私の母は離婚した後で、ほかの男と子供を二人もつくったのよ。だから、少しは血のつながった弟と妹がいるということになるわね」

「俺と同じではないか。それで家にいるのが嫌なんだな。その気持ちはわかる」

「あんたなんかと同じにしないでよ。そんなことより、どうしたら、いじめっ子のボスを

ここにおびき寄せられるのか、考えてみなさいよ」

そうやって美佐江は笑いながら帰って行った。

それから勇太はいつもに増して気力を高めて、トレーニングを行った。新しいメニューとして、河原の石を思い切り遠くの目標に当てることを思いついた。どこかに隠れたまま、麻山を狙うことができるかもしれない、と思ったのだ。投げ始めるとついつい夢中になり、日没が近くなるとコウモリが現れたので、それをめがけて腕が上がらなくなるまで投げ続けた。

お盆になって、父は新しい母に会わせると言って、勇太を民芸風レストランにつれて行った。奥座敷の予約席で待っていると、義理の母となる信代が武雄と美優を連れてやってきた。そして、美佐江も。

信代は「よろしくおねがいます」と勇太に言い、美佐江が離婚する前の子で、山杉高校の一年生だと言って紹介した。美佐江は素知らぬ顔をしている。

勇太はなんと行ってよいのかわからぬまま、ポカンとしていた。

「まあ、子供たちには複雑な思いや不満があるだろうが、これからはみんなで仲良くやってほしい。俺と美佐江ちゃん、信代と勇太との間には血のつながりはないのだけれども、同じ家族だと思って助け合っていこうではないか」と父は言って、「乾杯」と声を上げた。子供たちはジュースで乾杯した。勇太は何がめでたいのか理解できなかった。

それから父は、ふだん勇太には食べさせないような高い料理を次々に頼んだ。見栄を張っていると勇太は思った。馬鹿馬鹿しいので、勇太は黙っていた。美佐江も何も言わない。しかし、父はそんなことを気にかけずに、美佐江に話しかけた。

「美佐江ちゃんはどんなことが好きなんだい？」

「静かに読書するのが好きです。それも屋外の気持ちがい場所、ページをめくるのが日課です。それから日本舞踊とお琴を習っています」

「ほう、それでは勇太と正反対だな。こいつは読書なんかしたことがなく、外で魚獲りをしたり木登りをしたりするのが好きらしい」

「男の子らしくていいわね。今度、武雄にも教えてあげてね」と信代が言った。

美佐江は何も言わずに微笑んでいる。武雄と美優は運ばれてきた料理を夢中で食べていた。

勇太は何か気の利いたことを言おうとしたが、思いつかなかった。友人がいないので、

普通の会話ができないのが勇太の弱点だった。とくに子供にはどう接したらいいのか、わからなかった。勇太が普通に会話できるのは父と美佐江くらいのものだが、美佐江のことは知らないことになっているので、話しかけられない。もじもじしていると、美佐江が勇太に話しかけてくれた。

「勇太さんはお顔が黒くて、逞しく見えますね」

勇太が「はあ」と言うと、「こいつは家にあまりいなくて、外をほっつき歩いてばかりいるんです。だから黒い顔をしているんです。でも、喧嘩をしても負けるばかりで弱いんです」と父が答えた。

「弱くない。ほんとうは強いんだ」と勇太は反発した。

それを聞いて、美佐江は大笑いした。

「今度、皆でキャンプにも行ってみないか。川の上流に、釣りやバーベキューができるキャンプ場があるだろう。あそこへ行こう」と父が言った。信代と子供たちは嬉しそうだった。勇太が美佐江の表情を伺うと、まんざらでもないようだった。

学年委員会では秋の文化祭に向けて、舞台を企画していた。学級委員が総出演して、芝居を演じるらしい。その打ち合わせのために、一度学校に行かなければならなくなった。

勇太は周囲に注意しながら、打ち合わせが行われる教室に向かった。幸いなことに麻山たちは、この打ち合わせのことを知らないようだった。

芝居は、村人が幸せに過ごしていたところに、悪い山賊が襲いかかり、皆殺しになりそうになるところを、隣村からの援軍がやってきて救ってくれるという話だった。それまでいがみあっていた二つの村が、この襲撃と撃退を通して仲良くなる、というハッピーエンドの物語だった。

配役は不公平がないように抽選で決めることになった。皆は台本に目を通して、この役がいいとか、あの役は嫌だとか言い合っていた。勇太は台本など読む気が起きなくて、一人で窓の外を見ていた。

やがて抽選の結果、勇太は親孝行の息子の役になった。その息子は母親の手を引いたり肩を抱いたりして、助けようとするらしい。勇太が主役でなくてよかったと思っていたら、母親役に当たった女子生徒が騒ぎ出した。勇太と手をつないだり、勇太に肩を抱かれたりするのには絶対に嫌だ、と言いつ出したのである。それほど嫌われているのかと思った勇太は、芝居などしたくないから降板させてほしいと担当教師に頼んだが、それはだめだと叱られた。女子生徒は泣いていた。さすがに困った教師は、別の女子生徒と母親役を交代させた。

嫌な思いをしたうえに、長いセリフを覚えなくてはならなかった。ほかの秀才たちにはやさしいことだろうが、勇太には辛く厳しい任務だった。セリフが言えなかったら、麻山たちが大声で噛い罵るだろう。

やがて、父が言った通り、泊まりがけのキャンプに行った。美佐江もいっしょだった。千保川の上流に流れ込む支流の岸辺に、多くのテントを張ることができる広いキャンプ場があり、川では釣りや魚のつかみ取りを楽しむことができた。

勇太にとって、魚を釣るのも捕まえるのも慣れたものであり、その様子を見ていた武雄も美優も尊敬の眼差しで勇太を見ていた。これほど誇らしい思いをしたことは、生まれてから今日まで一度もなかった。信代も美佐江もにこやかに勇太たちを見つめていた。捕ったニジマスは串刺しにして焼いて食べた。バーベキューの肉や野菜も美味しかった。皆が仲良くしている様子里に、父は満足したようだった。

翌日、勇太は早起きして、キャンプ場の周りを走り回った。美佐江もいつものように本を読んでいた。

「キャンプ場に来てまで本を読むことはないだろう」と勇太は言った。

「こういう空気がきれいなどころでは、なおさら本を読みたくなるのよ。あんたが走りたくなるのと同じことだわ」

ところが、この幸せは長続きしなかった。麻山と進藤が家族とともにキャンプ場に来ていたのである。彼らは勇太を見つけると、獲物を見つけたライオンのように遠くから観察し、やがて勇太たちのところにやってきた。

「あれー、こんなところに勇太がいる。久しく会えなかったので寂しかったぜ」と麻山が声をかけてきた。

勇太はこいつらがいじめっ子だということを目で美佐江に知らせた。

「美人のお姉さんといっしょとは羨ましいもんだ。俺たちと遊びましょうよ」と進藤が言った。

勇太はここでこいつらをやっつけてやろうか、と思ったが、二人を相手に勝つ自信はなかった。それに、そんなことをしたら美佐江に迷惑がかかるかもしれない。結局、勇太は美佐江をほったらかして、全力で父のいるテントに逃げ込んだ。麻山たちはテントまで追いかけてきたが、父がいることに気がつくのと、テントの中にまで侵入することはなく、やや離れたところから見張っていた。

勇太は寝袋の中に入って寝たふりをした。

朝食のときに、「なんで私をおいて逃げたのよ。いくじなし」と勇太は美佐江に攻撃された。

「あそこであいつらをやっつけたら、この楽しいキャンプが台無しになってすまう。だから、みんなのために我慢したんだ」と勇太は強がりを見た。

「私はどうなってもよかったの？ あいつらに暴行されたかもしれないじゃない」

「美佐江さんは強いから大丈夫だ」

「なんの話だ。どうかしたのか？」と父が訊いてきた。

「不良の同級生が絡んできたんだ。美佐江さんがあまりに美人だから、ちよっかいを出したんだ」と私は嘘を言った。

「ここは熊が出るのが怖いと思ったが、不良が出たか。キャンプだから、そのくらいスリルがあつていいだろう」と父は笑いながら言った。

「熊は怖い」と武雄と美優が声を揃えて言った。

勇太は、熊なんかより人間のほうがずっと怖いと思ったが、そんなことを武雄たちに言ってもわからないから黙っていた。

キャンプから戻ったら、河川敷に怪しいやつがいた。勇太の隠れ家から五百メートルくらい上流にそいつは毎日のように現れた。その辺りも勇太の行動圏の一部であり、ゴミを捨てたり道を作ったりしていた場所であった。

何のためにそいつが河川敷にやって来るのか、勇太には理解できなかった。そいつは河原の上に寝そべったり、ヨシの間で何かを探したり、水際で石をめぐったりしていた。勇太は近寄って、何をしているのか訊いてみようかと思つたが、そこまでの勇氣はなかった。

やがて、そいつがいるときに美佐江があらわれたので、あいつは誰かと訊いてみたところ、美佐江の高校の同級生で、山沢芳樹ということがわかった。美佐江が言うには、学校の落ちこぼれで、誰にも相手にされない、いじめられっ子らしい。勇太が同級生かと思つたくらい、芳樹は幼く弱々しい顔をしていた。

相手が弱いことを知った勇太は芳樹のところに駆け寄った。それを見た美佐江もついてきた。

「何をしている？」と勇太は言った。

「……………」

「ここは俺の場所だ」

「ええっ？」と言って芳樹は笑った。「俺の場所ってことはないだろう。ここは河川敷だ。」

誰の場所でもない。おまえは馬鹿か」

芳樹はさらに大笑いした。それだけでなく、側にいた美佐江に向かって、「おかしいだろう。誰だ、この間抜けな男は。おまえの弟か」と言った。

美佐江は「弟と言えば弟かな。馬鹿と言えば馬鹿かもしれない」と答えた。

それを聞いた勇太は、かっとなって芳樹に体当たりした。

「何をするんだ」と言っつて芳樹も押し返した。

それから二人はくみずほぐれず状態になって鬨った。勇太にとってはじめての喧嘩だったので、木や草を相手にするのは勝手がちがったが、鍛えた腕力は役に立った。下手くそ同士の喧嘩は勇太がやや優勢であったが、美佐江が「お止めなさい」と一喝することによって終止符を打った。

「いじめられっ子同士が鬨ってどうするのよ。あんたたちの敵はほかにいるのでしょ

う」「こいつが俺の縄張りに入ったんだ。だから許せないんだ」と勇太は言った。

「どうしてここがおまえの縄張りになるんだ。理由を言え」

それを聞いていた美佐江は笑いながら、「そうよ、いいわね。暴力ではなくて言葉で議論するのよ。ちゃんと反論できるようにになれば、いじめられなくなるかもしれないわよ」と言った。

「この場所をきれいにして歩道を造ったのは俺だ。だから、この場所を利用するやつは俺の許可が必要なんだ」

「許可だつて？ ガキの遊び場所に許可なんかいるのか。それに、おまえの隠れ家はここから五百メートルも向こうではないか。俺の基地のほうがここに近いんだ、だから、ここは俺の場所だ」

勇太は少し混乱して上流のほうを見ると、手作りの犬小屋のようなものが見えた。いつの間に、あんなものができたのだろうか」

「どうしたの、勇太、言い負かされちゃったの？」と美佐江がせつついた。

「おまえは後からこの河川敷に来ただろう。先にここを占有したのは俺だ。だから、ここは俺のものなんだ」

「縄張りなんか、強い者がもてるんだ。先にいたつて、弱いやつは追い出されるんだ。サルでもアユでもそうなんだ」

「おまえは上級生のくせに強くない。さっきの鬨いだつて互角だったではないか。だから、俺に権利がある。そうだろう、美佐江」と勇太は訊いた。

「互角だったら、芳樹に縄張りの一部をあげてもいいのでは。それで二人で仲良く過ごすのはだめなの？」

美佐江が芳樹の肩をもったので、勇太は驚いた。美佐江は血のつながりはなくても、義理の姉だ。それがどうして、芳樹の味方をするのだろうか。

「そうだ、そもそも河川敷は市民みんなのものだ。管理しているのは国土交通省だ。お前が先にここで過ごしたことは認めよう。だけど、この辺りはおまえの縄張りの端だろう。そこを利用するくらいいいではないか」

勇太にはこれ以上反論する知恵は思い浮かばなかった。そして、河川敷では三人が微妙な間合いを保って過ごすことになった。

空では、カラスとトビがときどき闘いながら共存していた。川の中では、わずかながらアユが縄張りを作り、ほかのアユやハヤを追い払っていた。そして、ヨシ原ではオオヨシキリが激しく鳴きながら、縄張りを主張していた。生き物はどうして争うのだろうか。きつと攻撃しないと、ほかの個体にいじめられるからだ、と勇太は思った。いじめられて、その場所から追い出されたら、食物も隠れ家も失ってしまうのだ。

夏休みが終わって、勇太にとって地獄の学校生活が再開した。学年委員会の芝居の練習は毎日のように行われたので、勇太が河川敷に行く時間は遅くなり、その間に芳樹にさらに縄張りを侵略されるのではないかと気になった。

勇太の役は、母親を連れて逃げようとするものの、援軍が来るまでに殺されてしまう村人の役で、冴えないものの、母親をいたわる姿が見せ場だった。新たに母親役になった女子は、勇太とペアとなることは承諾したものの、手をつなぐことを嫌がり、練習ではつなぐぶりだけをした。勇太の成績はクラスでビリに近く、他の学級委員は秀才ばかりであったから、話の理解やセリフの暗記力には格段の差が生まれた。勇太のシーンは何度もやり直しとなり、そのために皆の帰宅時間は遅れ、共演者たちは苛立っていた。どこからなしに、あの馬鹿のために劇は無茶苦茶だ、という声が聞こえてきた。何であんな馬鹿が学級委員なんだ、という声も漏れてきた。

クラスでは相変わらず弱いふりをしていた。殴られれば殴られるままになり、蹴られれば蹴られるままになった。それでも相手が一人だけのときには、攻撃をかわしたり、反撃まではいかないものの、腕や足に力を入れたりすることがあった。一度、便所に引き込まれて、ウンコを食べさせられそうになったときには、一瞬の隙について逃げる事ができ

た。走力もついていた。

父は二つの家一つにまとめる、と言った。勇太が住んでいる家売って、義理の母や兄弟がいる家に勇太が引越すことになったのだ。新しい家は河川敷に近く、勇太の中学校の学区にはなかったのだ、この機会にじめを受けている中学校から転校することができたのだが、勇太はそれを拒絶した。なぜならば、それでは勇太が麻山たちに仕返しをする機会を失ってしまうからである。

河川敷で勇太は、どのように麻山を仕留めるか、美佐江に相談した。

「あいつをここに呼んで、はじめは俺を攻撃させる。それでしだいにあいつを川の近くにおびきよせるんだ。俺は泳げないことになっているから、川だけは勘弁してくれと懇願するんだ。あいつはそれで止めるようなやつではない。川へ突き落とそうとするだろう。そこであいつもしよに川へ引きずりこんで、事故に見せかけて殺すんだ」

「もし、麻山だけでなく子分たちも来たらどうするつもり？」と美佐江は訊いた。

「一人くらいだったら、大丈夫だと思う。川に引きずりこむのは麻山だけだ。溺れてもがくふりをして、麻山の足か腕をつかみ、あとは息の長いほうが勝つ。その点では絶対に負けない」

「なるほどね。あなたにしてはよく考えたわ。でも、こんなところまで来るかなあ。学校近くの陸上で闘ったら、すぐに麻山の子分たちが駆けつけて、ボコボコにされるわよ。そこをこのところをよく考えなさい」

文化祭では、ブラスバンドの演奏、ダンス、柔道や空手の型などが披露されたが、メイイベントは学年委員会の劇だった。ヤジを飛ばそうと麻山たちが最前列で手ぐすねを引いていた。

勇太の役はわき役であり、セリフも数回あるだけだったが、それでも忘れやしないかと勇太は緊張に包まれた。そして、勇太が母親役の女子の手を引いて舞台上に現れると、一斉にヤジが飛んできた。「止める」、「セクハラ」、「馬鹿野郎」、「帰れ」などと怒鳴られて、勇太は最初のセリフを忘れてしまった。

「どうした!」、「何をやっている!」と言われて、勇太の頭の中は真っ白になった。すると、相手役の女子が小さな声で、「母上、大丈夫ですか?」と勇太のセリフを教えてくださいました。勇太が「母上、大丈夫ですか?」と言うと、観客は一斉に大笑いした。その後の劇は勇太の失敗もあって、さんざんな出来となった。

終わってから主役の男子生徒にむなぐらをつかまれて、殴られそうになった。女子たちは前にもまして軽蔑の眼差しで勇太を見た。担当の教師からは「馬鹿」と言われた。

この日から、勇太のあだ名は「母上」になった。

「母上、女子と手をつなげられてよかったですね」とか「母上は言葉を覚えられない愚か者ですか？」とか言われるくらいはましなほうであり、誰もが勇太を呼ぶときに「馬鹿な母上」と教師の真似をするようになった。

学校では不愉快な思いをするだけだったが、隠れ場所である河川では、秋になってハゼが遡上してきたので、それを釣るのが楽しみになった。ほかの釣り人はもつと下流に集中していたので、勇太のところまでやって来る者はいなかった。涼しくなったので、美佐江が河川敷にいる時間も長くなり、勇太はハゼを一尾釣るたびに美佐江のほうを見て自慢しようとしたが、美佐江は読書に集中して、勇太を見なかった。

ハゼは三メートルほどの竿に糸と浮きをつけ、針にはミミズを刺した。いくらでも釣れるので、帰るときには大きな個体だけを持ち帰った。そして、家でハゼをてんぷらや甘露煮にして食べた。

やがて学校では、鬱陶しいイベントがまた近づいて来た。体育祭である。毎日、行進の練習をさせられ、さらに組体操である人間ピラミッドの担当が決められた。勇太はそれほど大きなほうではなかったが、ピラミッドの中央最下部で上に登る同級生たちを支える役にさせられた。トップは麻山である。同級生たちは、勇太が悲鳴を上げるのを楽しみにしていた。

しかし、勇太は体を鍛えていたので、ピラミッドの支え役など、どうということはない。しかし、それでは麻山たちは納得しないだろう。そこで、勇太は重い、辛い、つぶれるなどと嘘を言って、ときどきわざとつぶれて見せた。勇太がつぶれると、予想したように麻山たちは喜んだ。

そんなことを繰り返しているうちに、人間ピラミッドはしだいに完成に近づき、五段にも達しようとしていた。その成功は勇太と左右の土台の耐久力にかかっていた。勇太は麻山が五段のトップに立ったときに、自分が崩れたら、どうなるのかを考えてみた。自分が押しつぶされて怪我をするかもしれないし、トップの麻山が落ちて怪我をするかもしれない。ただ、勇太は体を鍛えていたので、大丈夫だと思った。一方、トップの麻山は高いところから落ちるので、痛い思いをするはずだ。

体育祭の本番では、大勢の観客が見ているので、勇太がわざとつぶれたことが誰かに見

破られる恐れがあった。そこで勇太は、本番前の最後の練習で、この企てを実行した。

ピラミッドの上にいる者は、勇太の動きを見ることはできない。勇太がつぶれることは、指導役の体育教師や両隣の生徒にしかわからないはずである。しかし、それがわざとなのか、体力的な限界によるものなのかは、そう簡単にはわからないだろう。

「さあ、ここできっちり決めておこう」と体育教師は言った。

勇太はそもそもどうして人間ピラミッドをしなければならぬのか、さっぱりわからなかった。グラウンドを走ったり、体育館でバスケットボールやバレーボールをしたりすることには、体力や反射神経を養う意味がある。それらに比べて、人間ピラミッドは危険なだけでなく、忍耐を要するばかりで、得るものが乏しい。体育祭で大勢の保護者が集まる前で披露することに、意味があるのだろうか。軍国主義の時代ではあるまいし、人間ピラミッドなどやめてしまえばよい。その意味でも、自分がこけることによって、たとえ自分が怪我をしても、それ以上に麻山を傷つかせ、この忌まわしい慣習をなくすべきだ、と勇太は考えた。

勇太はピラミッドが四段まで積み上がり、最後の五段目に麻山が乗って立ち上がった瞬間を狙って、両手、両足を崩した。人間ピラミッドは崩壊し、左右の土台役が悲鳴を上げた。勇太は自分から仕掛けたことなので、怪我をすることもなく、ただ痛いふりをすればよかった。そんな中で、麻山はピラミッドとともに崩れ落ちたが無傷だった。一方、勇太の右隣の金田順平が左手を骨折した。金田は勇太と同じようにいじめられることが多い生徒で、体の大きさは普通であったが、運動部には所属しておらず、人間ピラミッドについても嫌がっていた。しかし、この学校では教師は声の大きな生徒の言いなりであり、やはり麻山たちの主張通り、順平も最下部になったのだった。金田が骨折したので体育教師は大慌てで、授業は中止となった。勇太は麻山が無傷なことに落胆した。

一方、麻山たちは勇太と金田が崩れたと考え、金田が運び出された後で、勇太に詰め寄った。

「おまえらがつぶれたから、失敗してしまったではないか。この責任をどうするつもりだ。

俺は体育祭のヒーローになるところだったんだ」と麻山が勇太を突いた。

「つぶれたのは金田だ」と勇太は嘘をついた。

「おまえにも責任がある。どうしてくれるんだ」と進藤も攻撃した。

授業が途中で終わりになったので、残った同級生たちは勇太を人間ピラミッドと同じ体勢、すなわち四つん這いにさせて、次々にその上に飛び乗った。数十回の攻撃を受けて、

さすがの勇太もついには崩れ落ち、顔は砂まみれになった。しかし、勇太が麻山を傷つけるために、わざとつぶれたことは体育教師にもほかの生徒にもばれなかった。

勇太の父は家を一つにした。勇太は異母兄弟たちと同居することになったが、美佐江だけは親戚の家に預けられた。家が大きくないこともあったが、美佐江と父は血のつながりがなく、そのことを配慮したと思われた。美佐江はその親戚の叔母に琴と日本舞踊を習っていた。

河川敷で芳樹と出会うと、勇太は睨みつけ、さらにウーとかオーとか言って威嚇することもあった。芳樹はいつも棒切れを持っており、それを勇太に打ちつけるようなしぐさをした。しかし、二人が闘うことはなくなった。

ある朝、勇太は読書をしている美佐江に声をかけた。

「いつもここに来るのは、家にいるのが嫌だからか？ 家でいじめられているのではないか？」

「そんなことはないわよ。私はあんたとは違うのよ。ただ、友達と遊ぶよりは、こうして静かな場所で本を読むのが好きなのよ」

「美佐江は将来何になるつもり？」

「自分はどうかのよ。人に訊くなら、まず自分のことを話さない」

「俺はいじめられなければ、どんな職業でもいい。でも、できるならば、ここで魚やエビや虫を捕るように、自然を相手にした職業に就きたい」

「学者にでもなろうと言うの？ あんたみたいに頭が悪くては、大学には行けないし、学者になれるはずがないわ。あきらめなさい」

「自然の中で働きたい、と言っているんだ。体力には自信があるから土木でも建築でもいい。漁師になってもいいし、林業も魅力的だ」

「そんなに、なりたいものがいっぱいあるとは幸せね」

「美佐江はちがうのか？」

「私は本を読むことが好きだから、本屋さんで働こうかな。古書店の店番でもいいわ。琴と日本舞踊を生かすことができる仕事もしてみたい」

勇太には、琴と日本舞踊を使う仕事がなんなのか、よくわからなかった。

そんなことを話していたら、芳樹がやってきた。

「ちよっと頼みたいことがある」と芳樹は勇太に向かって言った。

「なんだ？」

「俺をいじめている奴をやっつけたいんだ。しかし、そいつを呼び出しても、仲間がつかめてくるかもしれない。一人なら勝算があるが、仲間がついてきたら、やられてしまうかもしれない。そのときに、助っ人になってほしいんだ」

美佐江は「よく闘う覚悟を決めたわね。勇太なんか、口先だけでまだ何もできないのに」と言っただけで、芳樹を褒めた。さらに、「勇太には助っ人なんか無理でしょうね」と言うので、勇太は思わず「引き受ける」と返事した。

芳樹はその相手をこの河川敷に呼び、相手が一人だけの場合には、勇太は隠れて見守ることになった。日時は後で知らせるとのことだった。

「そうだ、ここで喧嘩の練習をしましょう」と美佐江は言い、地面に石をあてて、丸い輪を描いた。「まずは相撲をしましょう」

美佐江が行司役になって、二人は相撲を取った。動きの速さは勇太のほうがまさっていたので、突き合いになったら勇太が勝つことが多かった。しかし、組み合うと山沢のほうが強く、上手投げや寄り切りで負けることが多かった。

「ただ相撲を取ると喧嘩はちがうわ。喧嘩では相手の弱点を攻撃するのよ」と美佐江は言った。

「弱点？」と山沢は訊いた。

「第一の弱点はキンタマね。キンタマを蹴られたら、うずくまるしかないわ。次に、相手の眼を攻撃するのよ。眼を突かれたら、涙が出て終り。石を持って突けば威力は増すわ。ほかに鼻や顎を殴れば、ダメージは大きい。でも、そう上手くはいかないかもしれないから、手でも足でもやりやすいところを攻撃すればいい」

そこで勇太と芳樹は互いに相手の弱点を突く真似をして、イメージをつくった。

「相手が武器を持つてくるかもしれないわね。こちらも、木刀や鉄棒を隠しておきましょう。負けそうになったら、これで相手をやっつけるのよ」そう言っただけで、美佐江は隠し場所を指示した。

新しい家での生活は、勇太にとって必ずしも快適なものではなかった。家に帰ると、義理の母と兄弟が迎えてくれ、食事も用意してあった。風呂だって、父の帰りが遅いときには一番初めに入れてくれた。しかし、ほんとうの母や兄弟とは異なる何かがある、勇太と新しい家族との間にあった。だから、安楽ではあったが休まらない気持ちになったのである。勇太はこれまでのように一人になる場所が欲しかった。

しかし、間もなく冬がやってくる。寒い冬に河川敷にいるわけにはいかない。それでは

どうしたらよいのか、勇太にはわからなかった。

中学校では、順平が、人間ピラミッドで最初につぶれたのは勇太だと言ったために、同級生たちの勇太への風当たりがますます強くなった。勇太が怪我をしなかったのは、自分からつぶれたからだということになった。担任教師も、自分の指導が悪いのではなく、わざとつぶれた勇太に問題があると言いだめた。勇太の呼び名は「嘘つき母上」になった。

麻山たちは休み時間になると、勇太の机にやってきた。そして、進藤が後ろから両手を、今出が前から勇太の頭を押さえたうえで、麻山が勇太の口を開け、その舌を引っ張り出してハサミで切ろうとした。勇太は「人殺し！」と叫んだが、麻山たちは唾うばかりだった。

それでも勇太は、ほんとうにハサミが口に入ったら、足で麻山のキンタマを蹴り、進藤と今出を殴り倒すつもりでいた。しかし、それをここで実行したら、クラスのほかの奴らを全員敵に回す恐れがあり、麻山を仕留めると言う究極の目標を達成できなくなるかもしれない。だから勇太はじっと我慢した。

とうとう芳樹が闘うことになった。勇太と美佐江は芳樹の背後で茂るヨシの中に隠れた。さまざまな武器は随所に隠してあった。

やって来たのは痩せた男で、それほど強そうには見えなかったが、いじめっ子特有のいやらしい目つきをしていると勇太は思った。武器は何も持っておらず、背後には誰もついてきていなかった。それでも、その男は芳樹を見るなり、「また、いじめられたいのか、弱虫め」と言って嗤った。

「一人だけなら楽勝だね」と勇太は美佐江に言ったが、美佐江は「まだわからない」と答えた。

相手が武器を持っていないので、芳樹も棒切れを捨てて組み合った。喧嘩というよりは相撲のような状態になったが、練習の成果が出て、芳樹が上手投げを決め、敵の上に覆いかぶさった。そこで相手を殴ろうとしたが、その一瞬相手を押さえる力が弱まり、その隙をついて相手は芳樹をひっくり返した。そして、芳樹の上半身を固めながら、その腹を膝で蹴った。

それを見ていた勇太は助けに行こうと立ち上がりかけたが、美佐江に押さえつけられた。

「まだ早い」と美佐江は言った。

芳樹は、蹴りに注意が向かった相手の首にかみついた。そいつはギャツと言ってひっくり返った。形勢が逆転した。さらに芳樹は相手の背中や頭を蹴り続けた。

「助けてくれ！」と叫んだために、芳樹は攻撃の手を緩めた。すると相手は、地面の砂と石を芳樹に向けて投げつけた。

「ウツ」と言っただけでひるんだ芳樹にそいつは体当たりし、芳樹を押し倒した。さらに攻撃しようとする相手の股間を芳樹は下から蹴りあげた。

「いい勝負でないか。芳樹もなかなかやるな」と勇太が言ったのに対して、美佐江は「しつ」と制して、闘いの行方を見守った。

一進一退の闘いが続いていたが、ふと護岸道路を見ると、二人の男が走ってきた。勇太は山沢の助っ人が来たのだと身構えた。しかし、走ってきたのは麻山と進藤だった。

「嘘つき母上、見つけたぞ！」と進藤が言った。ヨシの中に隠れていた勇太だったが、堤防道路からは丸見えのようだった。

「姉ちゃんもいっしょか。こんなところで何をしているんだ！」と言った麻山は、芳樹たちには気が付いた。

「邪魔だから帰ってくれ。友人が闘っているんだ」と勇太が言うと、「おまえに友人なんかいるものか。嘘をつくな！」と進藤が言い返した。

「もう面倒くさいなあ」と美佐江は言っただけで喧嘩をしている二人のところに行って行った。

「芳樹の友達が集まってきた。もう、おまえには勝ち目はない。さっさと帰れ。また芳樹をいじめたら、もっとひどい目に遇わずぞ」

喧嘩の相手は美佐江の剣幕にたじろぎ、さらに勇太たちを見て、これ以上ここにいては危険だと判断したのだろう。ヨタヨタと逃げて行った。

美佐江と芳樹は勇太のところに戻ってきた。

「この人たちは友達？」と芳樹は勇太に訊いた。

「同級生で俺をいじめている奴らだ」と勇太は答えた。

「いじめているとは人聞きが悪いな。俺たちは友達だ。いつも遊んでいるんだ」と進藤が言った。

「おい母上、おまえの姉ちゃんをちゃんと紹介しろよ。キャンプ場では逃げられたからな」今度は麻山が勇太にせまった。

勇太は「姉の美佐江だ。こっちは麻山と進藤だ」と簡単に紹介した。

美佐江は「この方が麻山さんね。お噂はよく聞いていますよ」と笑いながら言った。

「それはどうも。よろしくお願いします」と麻山は礼儀正しく挨拶したが、下心が見え隠れしていた。

「麻山さん、水泳はお得意？」と美佐江は唐突に訊いた。

「いや、それほどではないです。二十メートルくらいは泳げますけれど」と麻山が言うのを聞いて、美佐江はにっこりと微笑んだ。

芳樹は出血しており、疲れ切っていたので、一人で帰って行った。

勇太は早く麻山たちと美佐江を離れたかったので、「これから家でしななければならないことがあるから、姉と帰る」と言った。それに対して、進藤が「まだ、いいじゃないか。ここでみんなで遊ぼうぜ」と言ったが、美佐江も勇太に同調して河川敷を後にした。隠れ小屋や武器の数々を見られたら、面倒なことになる。かといって、ここでこいつらと闘うのは、麻山だけでなく進藤もいるのでむずかしい、と判断したのだった。

麻山たちが見ているかもしれないので、勇太と美佐江は離れずに勇太の家に戻った。その道すがら、美佐江は「麻山は泳ぎが得意でないようね。川に突き落とすとして殺してしまおうか？」と勇太に言った。

「あいつは美佐江が好きなようだ。俺にはわかるんだ。だから、美佐江が待っているから一人で来い、と言えばやってくるかもしれない。そこで川に突き落とすんだ」

「でも、それだと私たちが殺したことになるわ。それはだめよ」

「それなら、どうしたらいいんだ？」

「あんたが麻山一人を呼び、川を泳いで見せるのよ。そこで挑発して、あいつを川におびき寄せる。あるいは、あんたが溺れたふりをして、それを麻山が助けるようにしむけるの。」

あんたは助けを求めるふりをして、川に入った麻山をつかんで溺れさせるのよ」

「それはいい考えだ。冬が来る前に実行しよう」

勇太は麻山への報復の道筋が見えてきたので嬉しかった。

ところが、その二日後、放課後の掃除時間に、勇太は腹部に違和感を覚えた。腹痛というほどではないが、何か気持ちが悪いのである。勇太は「腹が変だから帰る」と言ったが、同級生たちは「母上がまた嘘をついたぞ」と言い、信じなかった。それでも帰ろうとする勇太は、何人かに腹をけられたり殴られたりした。やっとの思いで帰宅した勇太の腹はしだいに痛みを増し、夜になって立ち上がれないほどになった。

救急車が呼ばれ、病院で診てもらおうと急性虫垂炎であり、盲腸が腫れあがっていたために、緊急手術を受けた。虫垂炎が進行していたために、入院期間は三週間に及んだ。そして、そのために麻山への報復はしばらく延期されることになった。

手術は麻酔をかけて行われたので、どうということとはなかった。そして、その後の入院

生活は勇太にとって天国のようなものだった。きれいな病室に親切な看護婦たち。食事も淡泊ではあったが、何もしなくても与えられた。信代や武雄、美優が見舞いにきてくれた。そして、美佐江は河川敷に行く代わりに、毎日のように病院に来て、勇太のそばにいてくれた。

中学校の同級生たちは勇太を嘘つき呼ばわりしたことに加えて、腹部を蹴ったり殴ったりしたことについて、反省の手紙を書いてよこした。おそらく、担任教師が暴力による刑事事件になることを恐れて、同級生たちに書かせたのであろう。手紙には、気持ちが悪いくらいに優しい言葉が並べられていた。嘘だとわかっていても、それを読み直すことは、退屈な入院生活の中で気持ちがよいものだった。

退院すると、もう冬が始まっていた。木枯らしが吹きすさび、じきに雪が降ってきてそうだった。山から下りてきたシジュウカラ、ヤマガラやジョウビタキが木々の間を飛び回っていた。それでも勇太は、入院で落ちた体力を回復するために、毎日河川敷に行き、トレーニングを行った。こうして河川敷にいる時間は、勇太にとって病院にもまして幸せだった。

退院した直後、中学校では勇太へのあからさまないじめはなくなったが、日が経つにつれて、嫌がらせが増えていった。弱い者への攻撃性は人間の本性なのだろうか、そして、この状況を打破するためには、やはり麻山を倒すしかないと思った。

雪が積もり、本格的な冬になった。勇太は武雄や美優のために、家の近くで雪だるまを作ってやった。さらに雪が積もると、勇太はかまくらを作った。雪を集めて固め、山のようにした後で、入口から掘って中をくりぬくのである。体力を要する仕事だったが、それ自体トレーニングになった。かまくらで勇太は、餅を焼いたり、ラーメンを作ったりして食べた。トレーニングの神経衰弱や百人一首をすることもあった。勇太の記憶力は低く、武雄や美優に負けることが多かったが、それでも楽しかった。やがて、武雄や美優だけでなく、美佐江や芳樹もかまくら仲間になった。

武雄や美優とはあまり話をしたことがなかったが、かまくらでは打ち解けた話をした。「武雄は学校でいじめられないか？」と訊くと、武雄は「そんなことはないよ」と答えた。「意地の悪い奴は嫌いだろう？」と訊くと、美優は「お友達とは仲良くしなければいけない」と言った。

「ほんとうにみんな仲良しなのか？」とさらに突っ込むと、武雄は「変な奴はいる」と答えた。

「変な奴って、どう変なんだ？」

「かつてにいじめていて、勉強も運動もできないんだ。自分がいじめられている、と勝手に思い込んでいる」

「武雄はその子を見捨てているのではないか？」

「向こうが避けているから仕方ないんだ。ほんとうに変な奴なんだ。放課後に山に行って、一人で遊んでいるらしい」

「美優のクラスにも、そういうのがいるよ。先生も問題だって言っていたよ」

「それはみんながいじめから、いじめてしまったのではないかな。今度はやさしくしてみなさい」と勇太は言ったが、その子は自分と同じではないかと感じた。

この話を美佐江にもしてみた。

「学校という環境に適応できない子がいるのよね。過度にいじめられる子も、いじめられる子も、どちらも問題だわ。いわゆる発達障害というやつね。勇太は両親が離婚したから、そういう家庭環境も影響したのかもしれないわね」

「家庭環境というなら、美佐江も武雄も美優も同じようなものではないのか？」

「環境が同じでも個性がちがうから、いじける場合もあれば、そうでない場合もあるのよ。

私たちは環境が悪くても、こうして立派に生きているわ。それに対して、勇太は河川敷に逃避して、いまだに麻山を攻撃できていない」

「美佐江も河川敷に行っているではないか。友達もいないだろう。似たようなものだ」

「私は勉強ができるし、毎日本を読んで新しいことを吸収しているわ。あんなのようなお馬鹿さんとはちがうのよ」

「勉強ができて、将来幸せになれるとはかぎらない。俺は体力を鍛えているから、将来成功すると思う」

「体力だけが自慢の男なんて、頭の良い上司にこき使われるだけで、一生、下働きで終わるのよ」

「いいよ、どうなるか、十年後か二十年後が楽しみだ」

芳樹は決闘をしたことよって、その後はいじめられなくなったらしい。それを助けた勇太や美佐江とも、これまで以上に仲良くなった。

「決闘した奴は、その後どうなった？」と勇太は訊いてみた。

「仕返しされるかと構えていたけれども、何も言わないし、いじめもなくなった。あいつよりもずっと強い奴らもいるけれども、そいつらも気味悪がって、俺を攻撃しなくなった」

「俺もやつつきたい麻山という奴がいるんだ。そいつを川に沈めて殺す計画なんだ」

「殺しちゃったら、君は犯罪者になって処罰されるだろう。それでは君の一生はだいなしだ。殺してはいけない」

「でも、美佐江はいい計画だと言ってくれた。事故を装って殺すんだ」

「美佐江は突拍子もないことを言う。もっと現実を見なければだめだ。君のこれからの一生は、すぐに中学校の同級生とは関係なく進むんだ。その新しい世界で成功すればいいのだから、今は我慢していればいい」

「芳樹は決闘したではないか。今言ったことと矛盾するだろう」

「闘うくらいはしてもいいだろう。こっちの意地や根性を見せることは必要だ。でも殺してはいけない」

「よくわからないなあ。もう少し考えてみるよ」と勇太は言った。

芳樹と協力して、勇太はかまくらを河川敷にも二個作った。それぞれのかまくらは支部であり、そのネットワークが勇太たちの城だった。

ところが、かまくらのうちの一つ、河川敷に造った二号が、ある日壊されていた。上から潰されて、ペしゃんこになっていた。

かまくらを壊したのは芳樹の敵かもしれないし、麻山たちなのかもしれない。それを確かめるために、勇太は対岸の土手の上から、双眼鏡を使って河川敷に残された三号かまくらを見張ることにした。奴らのことだから、三号もつぶしにくるにちがいない、と思ったからである。

見張りを始めて二日後の放課後、麻山、進藤、今出の三人がスコップを持ってやってきた。そして、麻山は三号に唾を吐いた後、入口近くから、かまくらをつぶし始めた。頭に来たので、飛び出して制止しようかと勇太は思ったが、それでは三人にやられてしまう。

勇太はじつと我慢した。

せっかく作ったかまくらが二基もつぶされ、武雄たちにどう説明してよいか、わからなくなつた。もう、あいつらと闘うしかないのではないかと、勇太は覚悟を決めた。

勇太の覚悟に、美佐江も芳樹も賛同した。問題はどこでどう闘うかである。川に誘導して溺れさせるのは、この時期には無理である。勇太にしても、冬の川に飛び込む勇氣はない。

三人で協議した結果、河川敷に落とし穴をつくり、そこに誘導して痛めつける作戦を考えた。かまくらを作り直し、その手前の通路に落ちたら這い上がれないほど深い穴を掘る

のである。穴の上部は薄い塩ビ板で覆い、その上に雪をまいて、踏みこんだら穴に落ちる。もし、二、三人でやってきて、その全員が落ちなかったら、総攻撃をかけて残りも穴に突き落とす。

穴を掘るのは大変だった。土だけでなく、大小の石が多いために、ときどき芳樹が手伝ってくれたものの、勇太の体力をもってしても十日かかった。穴が深くなると、家から脚立を持ち込んだ。穴を掘っている勇太自身が抜け出せなくなるからである。穴が完成すると、予定通り塩ビ板で覆い、脚立は小屋の中に隠した。その後、降り積もった雪で、穴はどこにあるのかわからなくなった。

穴が完成して間もなく、麻山は一人で勇太の家にやってきた。

勇太が家の外に出ると、麻山は「姉ちゃんはどうした？」と脅すように勇太に言った。

「そんなことより、おまえらが俺たちのかまくらを壊したんだろう。それは許せないことだ」と勇太は言った。

「許せないだと？ おまえにそんな権限があるのか。嘘つきで馬鹿者がー」

「うるさい。姉ちゃんが河川敷にいるから言いつけてやる」

そう言って勇太は、河川敷めがけて走って行った。麻山は一人で追いかけてきた。その様子を家の中から見ていた美佐江は、芳樹に連絡して後を追った。

昨夜の雪で、河川敷に残されていた足跡はすっかり消えていた。粉雪が舞っていたので、これから残す足跡も夜のうちにすべて消し去られるだろう。勇太は麻山を殺すことも考えてみた。穴に落ちた麻山をそのまま一晩置き去りにしたら、おそらく麻山は凍死するだろう。麻山が穴に落ちるのは過失であるから、勇太がその責任を問われることはないはずだ。

やがて河川敷を小屋に向かって走って行くと、落とし穴を掘った地点にたどり着いた。

後ろから麻山が追ってきた。勇太は落とし穴の縁を回って、小屋の裏に隠れた。麻山が穴に落ちなかった場合を想定して、勇太は木刀を持って身構えた。人の気配に驚いたムクドリが一斉に飛び立った。河川敷にも堤防道路にも、ほかに誰もいなかった。

麻山は落とし穴の手前で立ち止まり、「そこに隠れていることはわかっている。降参するなら今のうちだぞ。出てこないと袋叩きにしてやる！」と叫んだ。

勇太は麻山の声がわずかだが震えていることに気が付いた。いつも、進藤や今出がいるからこそ強いのであって、麻山だけの戦闘能力は低いことを勇太は知っていた。麻山もそのことに気がついていたのかもしれない。

「うるさい」と勇太が小屋の陰から叫ぶと、麻山はそのまま小屋に向かって突進し、穴に落ちた。どしんという音がしたが、すぐに立ち上がって暴れ出したので、怪我はしなかったのだろう。しばらく穴から抜け出そうともがいていたが、その深さは二メートル以上あり、その壁は凍りかけていた。

「馬鹿野郎、早く助けろ」と叫ぶ麻山を、勇太は何も言わずに眺めていた。麻山は穴の横壁を何度も叩いていた。

やがて、勇太のところに美佐江と芳樹がやってきた。麻山一人が穴に落ちたのを見て、二人とも安心したようだった。

「おまえたち、こんなことをしてただですむと思うなよ。すぐにみんなで仕返してやる」
そう叫ぶ麻山に対して、勇太は「仕返しされるのは困るから、このままにして帰ろうか。そのうち何も言わなくなると思うよ」と言った。

それに対して、美佐江が「殺しちゃうのはまずいかもしれない」と言った。麻山は泣きそうな顔をしていた。

「でも勝手に穴に落ちて死んじゃったら、しょうがないかもしれない」と今度は芳樹が言った。

「これまでさんざん、私の弟をいじめたでしょう。反省しているのかしら」
麻山は黙っていた。

「殴ったり蹴ったりしたうえで、うんこを食べさせようとしただろう。おまえのしたことは犯罪だ。だから仕返しされてもしょうがないんだよ」

麻山は黙ったままだった。もう何かを言う元気がなくなったようだ。

「でもさ、このままこいつが死んだら、俺たちは殺人を犯したことにならないか」と芳樹が言った。

「この雪が積もれば、すべての足跡は消えるだろう。それに、穴に突き落としたわけではない。勝手に落ちたんだから殺人ではない」

そう勇太が言うと、芳樹は納得したようだった。

「いっそのこと、これから土砂を戻して生き埋めにしちゃおうか。そうすれば、死体はいつまでも見つからない。麻山は行方不明のままだ」

麻山の顔は青ざめていた。「やめてくれ、助けてくれ、もうおまえのことをいじめたりしない。約束する」

「ああ言っているけど、美佐江はどう思う？」

「信用できないわよ。性根が腐っているから、あんたをさんざんいじめたのでしょう。穴から出たら、復讐するに決まっている」

「そんなことないよ。もうしないよ」そう言って麻山は泣き出し、穴の底でうずくまった。

「麻山君、あなたの将来の夢は何だったの？」と美佐江が唐突に訊いた。

「どうしてそんなことを訊くんだ？」

「もう死ぬかもしれないから、最後に聞いてあげようと思ったのよ」

美佐江の声は低く、落ち着いていた。

「僕は大学の工学部に行って、ロボットを作るのが夢なんだ。自分のしたいことを何でもやってくれる夢のロボットだ」

「ここにそのロボットがいなくて残念だったね」と勇太は突き放した。

「せっかく勇太より頭がよく生まれたのに、いじめなんて生産性のないことをして、挙句の果てにこんなところで朽ち果てるとは、ほんとうにお気の毒ね。どうせなら、ロボットを作って、それをいじめていればよかったのにな」

そう美佐江が言うと、芳樹がふつと噴き出した。麻山は大粒の涙を流していた。

「でもね。このままこいつを殺したら、結局俺もいじめ返したことになる。そうになったら、俺がこいつと同じレベルに落ちることにならないかな」

勇太は心の底から出てきた感情をそのまま言ってみた。

それに対して、美佐江は少し考えたあとで、「勇太、えらいわね。ついにそのことに気がついたのね。私は嬉しいわよ」と言った。

「穴の上から攻撃するのは卑怯かもしれない。俺はちゃんと闘ったのだから」と芳樹も口を開いた。

少し考えてから、勇太が「よし、これから俺は麻山とさして闘うことにする。武器は持たない。穴の中で対決するんだ」と言うと、美佐江も芳樹も賛成した。

小屋に隠しておいた脚立をおろして、勇太は麻山に向かった。それを見た麻山は、降り立った勇太を突き飛ばして、脚立を登って穴から出ようとした。勇太は脚立にすがりついた麻山を引きはがすと、脚立を引き上げるように美佐江に合図した。こうなると、麻山も勇太と闘うしかない。

殴ろうと突っ込んできた麻山をかわし、その腰を抱きかかえた勇太は、思い切り麻山を雪の上に放り投げた。痛いと呼ぶ麻山を仰向けにすると、勇太は馬乗りになって麻山の両肩を自分の両膝で押さえつけた。麻山は身動きができなくなった。そのままの姿勢で勇太

が麻山の頬を何度も平手打ちすると、やがて麻山は鼻血を出し、それが顔中に広がった。

「苦しい……、殺されるー」と麻山は言ったが、勇太は手をゆるめなかった。ほんとうに殺してもいいと思ったからだ。それにしても、麻山は一人だとこんなに弱いのか。

「もうやめなさい！」と言って美佐江と芳樹が勇太を制止した。勇太はようやく我に返って叩くのを止め、自分を支配していたいじめっ子が泣きながら咳き込むのを見た。

「帰れ、俺はいつでも相手をする！」と勇太が言うと、麻山は投入された脚立を必死で上り、足を引きずりながら帰って行った。

「このあとどうなるかなあ」と勇太は美佐江に訊いた。

「麻山はもうあなたに手出しできないでしょう。自分がやられたとは、学校で言えないはずよ。教師は何も言わないでしょうけれども、もし何か訊かれたら喧嘩をしたと言えればいい。問題は進藤と今出ね。あいつらは、またあなたをいじめようとするかもしれない」

麻山に勝ったことよって、勇太の体中に自信がみなぎってきた。そもそも勇太がいじめられるようになったのは、勉強ができないことや友達がいじめられることよって、自信を失っていたためである。体力は人並みにあったが、実際に闘うことはなかった。それが、河川敷でのトレーニングによつて、足腰が鍛えられ、木登りや水泳によつて腕の筋肉も強くなった。そして、何よりも、美佐江を初めとする新しい家族や芳樹と交流することによつて、人と接することに恐怖を感じなくなっていた。勇太にとつて、もはやいじめられる理由はなくなったのである。勉強はできないままだったが、社会的に生きる力がありさえすれば、勉強ができないことなんかどうでもよいように思われた。

翌日、中学校にあらわれた麻山は、頬を腫らしていたものの、いつもと変わらない様子だった。勇太は何か言ってくるかもしれない、と身構えていたが、麻山が勇太に近寄ることとはなかった。新藤たちが勇太をいじめようとしたときでも、麻山はその輪に入らなかった。勇太は何度か麻山と視線を交えようと試みたが、そのたびに麻山は視線をはずした。

勇太がいじめられることに鈍感な担任は、麻山の頬の腫れにも気がつかないようだった。勇太の場合と同じように、ただ無関心を装っていたのかもしれない。その結果、勇太が学校側から何か言われたり、問題にされたりすることはなかった。

帰宅時に中学校の出口で進藤が近づき、「嘘つき母上」と言ってきたが、勇太は進藤に向かつて「それがどうした」と言って睨みつけた。進藤は勇太が反抗するとは思っていなかったらしく、一瞬驚いた顔をした。今の勇太にとっては、進藤も一人だけならば怖くなかった。

春になって、勇太たちは三年生になったが、クラスは変わらなかった。麻山が勇太に暴力をふるうことはなくなった。その態度につられて、進藤や今出によるいじめもほとんどなくなっていた。

麻山の態度が変わったことを実感したのは、クラス委員の選挙だった。麻山はクラス委員に立候補し、進藤が推薦した勇太と争うことになった。しかし、もともと勇太には人気はなく、四十人の生徒のうち勇太に投票したのは二人だけだった。勇太とペアにならずにすんだ女性の委員は小躍りして喜んだ。

座席の位置は、これまではくじで決められ、それを変更することは許されなかった。ところが、麻山が委員になってから、両者が同意したら自由に席を交代してもよくなった。その結果、くじの後には、さまざまな駆け引きが展開され、何人かの生徒は誰からも嫌われることになった。

男子生徒で最も嫌われたのは勇太であり、同じように嫌われた女子とばかり机を並べることになった。とくに、広瀬早智子は背が低く、声が小さくて勉強もできなかったのも最後までペアが決まらず、結局勇太と隣になることが多かった。一方、麻山はいつも勇太の近くに座るようになった。そして、テストが返されるたびに、その点数を勇太にわざと見せびらかした。

クラスでもトップクラスの成績をほこる麻山には家庭教師がいるらしく、テストの点数はほとんど満点だった。教師たちは、授業の理解度を把握するために、授業中にしばしば問題を出した。初めに勇太やその隣の席にいる頭の悪い女子生徒を指して質問するが、ほとんど答えられない。すると教師はその近くに麻山を指名し、麻山は見事に正解を答えることになる。そのたびに麻山は得意そうに勇太を見た。

中間試験や期末試験が終わると、各自の通知表に学年とクラスにおける順位が記入された。さらに学年で二十位までの生徒は、その氏名が廊下に張り出された。麻山の学年順位は悪くても十番以内であったが、勇太の場合には三百人中、下から二十番以内だった。

学校にいるのがまたしてもつまらなくなった勇太は、放課後になると河川敷に向かった。春になって、美佐江もまた河川敷にすることが多くなった。

「勉強ができなくて麻山に馬鹿にされる」と美佐江に言くと、美佐江は「ははは」と笑いながら、「それなら勉強すればいいでしょう。テストでいい点をとるのは、いじめではなくて正当な競争でしょう。競争に負けたのは自分が勉強しなかったか、そもそも頭が悪いせ

いだよ。もっと努力して、いい点をとって麻山に勝ちなさいよ」と言った。

「少しくらいの差ならどうにかなるけれども、全然学力がちがうんだ。麻山の家は裕福で家庭教師がついている。あんなレベルに届くはずがない」

そのとき、芳樹もあらわれた。

「芳樹の成績はどのくらい？」と勇太が訊くと、芳樹が黙ってしまったので、美佐江が「中の下くらいじゃない。勇太よりは上だよ」と言った。

「ひどい言い方だな。でも、確かに俺は美佐江にはかなわない」と言って芳樹は実力の差をみとめた。

それに、美佐江と芳樹は進学校の生徒である。その学校で中の下ということは、中学校なら学年で三十番には入っていたはずだ。勇太は自分が一番出来の悪いことを思い知らされて落ちこんだ。

その姿を見て芳樹が「大丈夫だよ。勉強ができなくなっちゃって、成功する仕事はいくらでもある。勇太の強みを生かした職業に就いたらいいんだよ」となぐさめた。

「俺の強みって何だろう」と勇太がつぶやくと、「そんなことは自分で考えなさい。何をしたいのか、何ができるのかを考えるのよ」と美佐江が答えた。

「芳樹は何をしたいの？」と勇太は訊いてみた。

「俺は日本の歴史に興味があり、将来は歴史の研究者になりたい、と思っている。そのために、読書はもちろん、地域の神社仏閣、古墳、古戦場、古城、歌碑などを見に行くのが楽しみなんだ。ただ、それが実現できる夢なのかどうか、確信はない。学校の日本史なんか、偉人の名前や歴史的な出来事が起こった年さえ暗記すれば、よい成績を収めることができるけれども、研究者は何をすればよいのだろうか？ それを毎日考えているんだ」

「そうだったの。河原に遊びに来るお馬鹿さんだと思っていたわ。ごめんなさいね」と美佐江が言った。勇太はただ口をポカンと開けて聞いていた。

「過去に残された文書や遺物は限られており、すでに分析されている。日本中にいる何百人、あるいは何千人もの歴史の研究者、学校の先生、歴史小説家や脚本家がしらべた結果は、よほどのことがない限り、定説としてまとめられている。そこで今から研究して、何かすごいことがわかるのだろうか。もちろん、新しい資料が見つかるということもあるだろう。発掘されていない遺跡や誰も見たことがない文書は、まだまだあるはずだ。しかし、それを自分がしらべたり見たりできるとは限らない。結局のところ、歴史の研究者をめざしても、新しいことを発見することはできずに、教科書に書かれたことを教えるだけにな

ってしまふのではなからうか。しかし、歴史なんて、ほんとうに教えられるものだろうか。自分が興味を持って勉強するならばともかく、学校で教える歴史は退屈でつまらない。暗記するための知識の押しつけだ。過去の人たちが何を考え、どう生きていたのかがよくわからぬままに、過去の政権の変遷や権力闘争を教えても、それが現在の知恵として役立つことはほとんどないのではないか、そういう疑念が芽生えているんだ」

「ふーん、むずかしいことを考えているのね」

「何もかもがわからなくなってしまうと、ここへ来て瞑想するんだ。昔の人たちが何をどう考えていたのか、想像することもある」

「昔の人たちは食料もなかったから、ただひたすら働いていたと思うわよ」

「それなら、どうして古事記や日本書紀や万葉集のような書物ができたんだ。何千年も前から、人間は厳しい自然や他人との軋轢の中で、さまざまな思いをして生きてきたんだ。昔の人たちは食べるものも満たされず、病気の危険も大きな中で耐えていた。身分のちがいがあつて、いつ殺されるともわからない中で、仏や神を頼って生きていたのだ。何も考えないなかつたなんて決めつけてはいけない」

芳樹の言うことを聞いていたら、勇太は自分の悩みがちつぽけでつまらないものと思えてきた。勉強ができなくても、食っていければいいんだと思うと、何だか自信が湧いてきた。

「美佐江は何になりたいの？」今度は芳樹が質問した。

「私はね、こんな田舎はさっさと出て、都会でスポットライトを浴びたいわ。アイドルや女優になるのは無理かもしれないけれど、踊ったり歌ったりして観客を魅了したいの。ミュージカルなんかやってみたいわね」

「本ばかり読んでいたから、作家にでもなるのかと思っていた」と勇太は思ったまま言った。

「本を読んで見聞を広めることは、どんな職業に就いても必要なのよ。それに作家になるのはとてもむずかしい。でも、スポットライトを浴びるくらいなら、いろんな方法がある。地下アイドルでもストリップでもいいわ。私はお琴を習っているから、琴を奏でるストリップなんていけない？」

「俺はどうしたらいいのかな」勇太はますます混乱して、わけがわからなくなった。

そこで美佐江が「麻山がやることと反対のことをしてみたらどうかな」と言った。

「反対って……？」

「麻山はせっせと勉強して、テストでいい点をとって、偏差値の高い高校や大学に行く。その陰で、あんたのような落ちこぼれを馬鹿にする。それから大企業に就職して、安定した生活を送るのよ」

「いやな奴だ」思わず勇太はつぶやいた。

「そんな奴は世の中にいっぱいいるのよ。だから、あんたが麻山をつぶすことができたとしても、同じような奴がわんさかいる。そんなのは相手にしないで、自分の道を探すのよ」

「川で泳ぐことと穴を掘るのは得意だ」

「土木や建設会社で働くのもいいかもしれないわね。でも、あんたを雇ってくれるのは地方の下請け会社でしょう。大学を出たエリートへの指示にしたがって、下働きをするだけに限りそうね」

結局、勇太にはよいアイデアは思い浮かばなかった。美佐江は何を言ってもだめだと、はねつけるばかりだ。義理でも姉なのだから、もっと親切に教えてくれてもいいではないか。

そこで勇太は、家に帰って武雄と美優に訊いてみた。

「お兄さんがどんな仕事したら嬉しいと思う？」

武雄は少し考えてから、「何億円も稼ぐプロ野球かサッカーの選手がいい」と言い、美優は「社長になってほしい。無理だったら部長でもいい」と言った。

どっちもだめだと勇太は思った。一流のスポーツ選手になるためには、子供の頃から死に物狂いで練習する必要がある、それでもたいていは二流以下で終わる。頭の悪い勇太が社長はおろか部長になることも無理である。子供に訊いたのがまちがいだった。

子供たちの話を聞いていた弘明は、「もっと現実を見なければだめだ。おまえのように頭の悪い子が高校に行ってもろくなことはない。中学校を卒業したら、お父さんの工場で働かないか。安いけれども給料がもらえるから、うちの家計も楽になる」と言った。

「嫌だ。美佐江だって高校に行っているではないか。俺も高校に行く」勇太は父に反発して言った。

「美佐江は優秀だから大学にも進学させて、才能を伸ばしてやりたい。そうすれば、高い給料をもらうようになるだろうし、将来性のある男と結婚できるだろう」

金のことしか言わない弘明に、勇太はうんざりした。この調子だと、武雄と美優も早くから働かされるのだろう。

翌日、クラスで麻山を見ていたら、やたらと髪に手をやったり、制服の乱れを直したりしていた。しかも、クラスでもっとも美人だと言われていた八神萌絵の方ばかり見ていた。麻山は八神を好きなんだ、と勇太は理解した。勉強しか取り柄のない奴が恋をするとは滑稽だと勇太は思った。

ところが、麻山が萌絵を見ても、萌絵は視線を合わさなかった。萌絵に無視されると、麻山は落胆したようだが、直接萌絵に声をかけることはできなかった。必要もないのに萌絵に近づいたり、萌絵の目を見ようとしたりするものの、それ以上の行動をする度胸はないようだった。

勇太は思わず隣の席にいた早智子に声をかけた。

「広瀬さんのお父さんは何をしているの？」

早智子は少し驚いたような顔をしていたが、「海の漁師」と答えた。

「へえ、魚を捕るのはおもしろそうだね。俺も川で魚を捕まえるのが得意だ。今度、お父さんに紹介してくれない。手伝うから漁に連れて行ってほしいんだ」

親の職業はクラスでの序列に影響する。勇太のクラスでは、大会社の部長、課長、工場長の子供が威張っており、麻山もその一人だった。公務員も評価され、飲食店を経営している場合には、その規模がものを言った。序列が低いのは、父親が工員か、農業に従事している場合だった。母子家庭の子供も差別されていた。

そんな中で、漁師は網元でないかぎり農家よりも低く見られることがあり、それが早智子の序列が低い理由の一つとなっていた。それでも、魚を捕まえるのが好きな勇太にとって、漁師は魅力的な職業だった。

「どんな魚が捕れるのかな？」

「今はアジやイワシが多いけれども、タイやヒラメを捕ってくることもある」

「新鮮な魚がたくさん食べられて羨ましい」

「魚は食べ飽きたから嫌い。肉を食べたいけれども、めったに食べさせてくれない」

ふと気がつく、麻山が勇太たちをじっと見ていることに気がついた。その眼差しは、かつて勇太をいじめていたときに見せた、勝ち誇ったような、快樂ホルモンに酔っているようなものではなく、怯えと羨望と劣等感が入り混じっているようなものだった。勇太はいじめを通して、相手の表情や行動を観察する術を身につけていた。次に相手がどのようふるまうのかを把握しないと、ますますひどい目にあうからである。その観察眼が、勉強とはまったく違うレベルで、勇太の優越を感じさせていた。

勇太は次の日曜日の昼に早智子の家を訪ねた。海際の漁村では、ほうぼうで干物の匂いがした。家と家の間隔が狭く、路地には猫があふれていた。早智子の家は古い木造の二階建てであり、今にも崩れ落ちそうだった。呼び鈴を鳴らすと早智子が出迎えてくれ、すぐあとに幼い兄弟が五人も顔を出してくれた。

早智子の母と祖母は勇太にも昼食を出してくれた。ボラの刺身とカナガシラの煮つけにアラ汁と漬物がついており、勇太にはとてつもないご馳走に思われた。

「こんな魚は売れないから自分たちで食べるんよ」と早智子は言った。

やがて漁から帰ってきた早智子の父、義男も勇太を歓迎してくれた。

「おまえはなかなかいい体をしているな。なんかスポーツでもやっているのか」と訊かれたので、「川で泳いだり魚を捕まえたり、かまくらをつくったり、河原で大きな穴を掘ったりしていました」と答えた。こんなことを言って理解されるはずはないな、何を言っているのだろう、と勇太は思ったが、義男は「おうおう、おもしろい奴だ」と言って褒められた。

次の日曜日、勇太は義男と漁に出た。仕掛けてある刺し網を引き揚げて魚を捕る仕事だったが、波があつて船は揺れた。網を引き揚げるのは早智子の父と祖父、それに勇太だけだった。それでも、刺し網にはカサゴ、メジナ、クロダイなどがかかつており、勇太は夢中になって魚を回収した。

義男は「船酔いしないか？」と訊いてきたが、勇太は平気だった。いじめられて突きまわされていたことに比べれば、この程度の揺れはどういうことはなかった。漁が終わって「疲れただろう」と言われたが、河原でトレーニングしていたことに比べれば、軽い運動にしか感じなかった。

それから勇太は暇があれば、漁船に乗せてもらうようになり、早智子の家に泊めてもらうことが多くなった。中学校では、もはや麻山のことはどうでもよくなり、その視線を見ることがなくなった。クラスでは早智子とばかり話をしてきた。勉強は相変わらずビリに近かったが、そんなことは気にならなかった。

ある晩、漁に出たあとで、勇太は若い漁師の飲み会に誘われた。誘ったのは網元の息子である氷川健人だった。未成年だから酒は飲めないと断ろうとしたが、「酒は飲まなくていい、親睦を深める会だ。うまいものを食べていけ」と言われたので参加した。

飲み会には八人の若い漁師がおり、そのうち何人かは嫁を連れてきた。初めは酒を断っていた勇太であったが、しだいに皆が酔う中で、「俺は小学生の時から飲んでいた」、「俺の

酒が飲めないのか」などと言われ、盃を飲み干すようになった。酒を飲んだことはなかった。すぐに酔いが回ってきた。

「おまえ、早智子とできているらしいな」

突然、健人が訊いてきた。

勇太が黙っていると、健人は「もうエッチはしたんだろうな」と言い、男たちは一斉に笑った。勇太が顔を真っ赤にすると、健人の嫁が「ほら赤くなっている。まだ童貞なのよ」と言ってさらに笑った。

「俺の嫁を貸してやろうか。それも勉強だ」と健人が提案すると、嫁の方は「ちよつとやめて、この子は私の好みではないわよ」と言って勇太から遠ざかった。

「あそこの家は貧乏だから船も小さいし、早智子と結婚したら苦勞するぞ。この村では網元が一番偉いんだ。定置網をもっているから、自然といい魚が捕れるんだ。わかったか」と言って健人は勇太の盃を一杯にしたが、勇太はもう飲めなかった。

自分が注いだ酒を飲めなくなった勇太に、健人は怒り出した。

「俺様を馬鹿にしているのか。このくらい飲めないようでは、漁師は務まらないぞ」

「すいません」

「もつと修行しろ。そんなことではだめだ」と言って、健人は盃を壁に叩きつけた。

叩きつけられた盃を拾おうと勇太が背を向けると、「俺にケツを向けるな」と言って、健人は勇太の尻を蹴飛ばした。その勢いでひっくり返った勇太を見て、女も男も大笑いした。

帰り際、ふらふらになった勇太に「大丈夫か」と声をかけてくれたのは、漁師の中でもとりわけ筋肉が発達した村口勝彦だった。勝彦は早智子の家の隣に住んでいた。

「いろいろ言われたけれども気にするな。健人は網元の跡取りということで威張りたいたいだ。酒癖も悪い。ひどいことを言われてショックかもしれないけれども、忘れることだ」
確かに勇太はへろへろになったが、言葉のほかは一回蹴飛ばされただけだった。悪意を感じたとしても、それは健人とその嫁だけだった。中学校で孤立無援の中で、攻撃されまくっていたことに比べれば、どうということはない。それに、誰が相手でも、機会を見て逆襲することもできる。

「大丈夫です。私の心は鍛えられているので、なんともないです」と勇太は答えた。実際、これくらいのは、いじめられたうちに入らなかった。

勝彦は二十歳になったばかりであったが、若い頃には喧嘩ばかりしていたらしい。飲み会のあと、勝彦は勇太を弟のようにかわいがってくれた。

あるとき、中学校からいっしょに帰る勇太と早智子の後を、麻山たち三人がつけてきたことがあった。早智子の家をつきとめて、麻山と進藤が石を投げてきた。音がしたので、勇太が外に出てみると、麻山が「女たらし！」と言って突進してきた。仲間がいるので勝てると思っただのかもしれない。

勇太が立ち向かおうとしたら、それより早く勝彦が間に入って麻山を突き倒した。ついで突っ込んできた進藤と今出は、勝彦に蹴られて動けなくなった。麻山は倒れたときに頬に切り傷ができ、血だらけになっていた。

「まだやるか！」と言われて、三人は逃げるように帰って行った。

その晩、早智子の家で、勇太は中学校での出来事、さんざんいじめられていたこと、早智子も蔑まれていたこと、それでも河原で麻山を穴に落として懲らしめたことなどを残り隠さずに勝彦や義男に話した。

勝彦は「一人でよく反撃した」と言ってくれた。義男は「早智子の味方になってくれてありがとう」と感謝してくれた。一方で、勇太は麻山たちにこれ以上関わるのは御免だと思った。

やがて、勇太は早智子とともに中学校に行かなくなり、義男の家に住むようになった。そのことについて、弘明は何も言わなかった。担任の神谷は、中学校は義務教育なのだから卒業までは通うようにと何度も言ってきたが、勇太も早智子も従わなかった。

「学校ではいじめられてきたので、もう行きたくない。それに対して先生は何もしてくれなかった」と言うと、神谷は何も言えなくなった。義務教育なので、学校に行かなくても卒業することができた。

それから十年が経ち、勇太は自分の船を持つようになっていた。早智子との間には三人の子供ができ、義男の家の近くに、新しく自分の家を建てたところだった。船と家のローンを返すためには、あと三十年働かなければならなかった。それでも、次々に引退する漁師がいる一方で、新鮮な地魚の人気は日増しに高くなっていった。漁協では、通信販売も行って、美味しい魚を家庭やレストランに売るようになっており、勇太は重要な戦力になっていた。健人は酒を飲んで悪態をついていたが、翌日にはすっかり忘れていた。勇太が漁師仲間からいじめられることはなかった。

勇太の体は、漁師としての経験を積むことによって、ますます鍛えられていった。船を出し、仕掛けを投入し、網を引く。一日中体を動かすのであるから、遅くなるのは当然

だった。

麻山たちが漁村にやって来ることはなかった。一度だけ町のショッピングセンターで麻山に遭遇したことがあったが、麻山はこそこそと逃げて行った。勇太は進藤や今出が来て怖くなかった。むしろ、今の勇太ならば、二人を相手にしても勝つ自信があった。

芳樹は大阪の大学に入学した後、大学院で歴史の研究を始めていた。美佐江は高校を卒業すると、東京でバイトをしながら劇団の研修生となっていた。お盆の頃になると、二人とも帰省し、勇太の家に集まった。今や、一番裕福なのは勇太であり、獲れた魚を料理してごちそうしてあげるのが決まりになっていた。

芳樹が一番興味を持ったのは、漁の網にかかった壺や茶わんだった。それらを一つ一つ吟味しながら、いつかお宝が出るかもしれないと言った。美佐江は勇太の船で沖に出ると、女優になって芝居をしてみせた。タイタニックのローズを演じるときには、芳樹がジャックになった。そんな様子を見てみると、勇太は無性に楽しくなった。

勇太は河川敷で体を鍛えていた頃を思い出した。網に絡まってボロボロになった魚のように惨めだった自分が立ち直るきっかけをつくってくれた河川敷。あの場所で美佐江や芳樹と出会ったことが、網から抜け出す第一歩になった。あの頃は、ただ走り回り、やみくもに木刀を振っていたけれども、漁師となった今では知恵も必要である。

定置網を回収するのではなく、自分で網を仕掛けて魚を獲るためには、海の状態を知る必要がある。海は毎日変わっている。天候、時間帯、潮の動きはもちろん、魚群探知機の映像を読む技術も欠かせない。自分だけでなく、他の漁師の漁獲についても気を配り、どこに網を仕掛けるかを決めなければならない。そのうえで勇太は、海のすみずみまで観察する能力に長けていた。海鳥の動き、水面で騒ぐ小魚、サメやイルカの動向、そして同僚の動き。とくに、勇太は沖に出て、一本釣りでカサゴ、ハタ、アカムツ、ヒラメなどの高級魚を獲ることが得意になった。どこにどのような漁礁があり、餌魚やジグをどう流せば釣れるのかを、試行錯誤しながら独力で学んだからだ。釣れた魚は神経締めにして出荷したが、鮮度がよいので高値で売れた。

魚が捕れないと収入は減り、子供を養うことはできない。しかし、それだけ責任があり、自分だけでなく守るべき家族がいることが勇太には嬉しかった。

了

本作品の背景、登場人物は実在するものではありません。